

---

# 激闘 陸軍船舶戦記【暁の新生帝国外伝第四弾】

田口 嘉雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

激闘 陸軍船舶戦記【暁の新生帝国外伝第四弾】

### 【Nコード】

N6551E

### 【作者名】

田口 嘉雄

### 【あらすじ】

大東亜戦争 その大海原では海軍だけでなく、陸軍が独自に編成した空母・潜水艦・攻撃艇といった数々の船艇が活躍し、そして沈んでいった……。 「暁の新生帝国」の世界を、ある陸軍軍人によって別の視点から語る、暁の新生帝国の外伝シリーズ第三弾。太平洋戦争の歴史から忘れ去られた多くの陸軍船舶とその乗組員の死闘を描く。

## プロローグ

### プロローグ

#### 小笠原沖海上

戦時高速型輸送船十隻とそれを囲む様に護衛する第五十一艦隊は、南洋の一大拠点トラック環礁に向けて波静かな海上を航行していた。駆逐艦「松」の航海長、大谷大尉は横に見える輸送船「日進丸」を眺めていた。

輸送船「日進丸」は船籍こそ日本郵船であるが、運用は陸軍が行っていた。

その船橋に「松」を眺める一人の陸軍軍人がいた。

名前は田口嘉雄、陸軍少佐で「松」の大谷大尉とは従兄弟の關係に当たる。

佐賀県から陸軍幼年学校を経て、士官学校を卒業したエリートである。

彼の物語は、この「日進丸」船上から始まる

## 第1章 船舶総司令部

「センセン！チンチン！」

「我、敵潜水艦の攻撃を受く」を意味するこの電文が、陸軍船舶師団総司令部に打電され、輸送船「日進丸」船内は慌ただしい様相を呈していた。

「空母『摩周』から入電！船団の方位左三十、距離二 に敵潜水艦らしき物見ゆ！」

私は田口嘉雄、陸軍少佐で「日進丸」の警備司令部付参謀だ。

陸軍士官学校を卒業した自分は、しばらく満州の工兵部隊においてスコップとツルハシ、そして時には小型舟艇を用いた作業に就いていたのだが、大東亜戦争が始まり少し過ぎた頃、思いもよらぬ場所に配属された。

陸軍船舶総司令部 突如として陸海軍の再編が行われ新部隊が設立されたうち、この「陸軍船舶総司令部」もその一つだ。

もともと、「船舶輸送司令部」として徴用船舶の運用管理等を行っていたが、昭和十七年に帝国海軍の「海上護衛総隊」が設立されると同時に、組織を大幅に改編、ここに「陸軍船舶総司令部」が設立された。

陸軍船舶総司令部は、揚陸師団・海上輸送師団・海上戦闘師団・海上飛行師団・船舶教導本部を傘下に持ち、各師団には次の様な部隊があった。

・第一師団（上陸師団）

揚陸大隊、強行補給大隊

・第二師団（海上輸送師団）

輸送大隊、船舶砲兵大隊、防空大隊、船舶工作大隊、病院船舶班  
・第三師団（海上戦闘師団）  
海上戦闘大隊、沿岸戦闘大隊、潜水戦闘大隊（後廃止、海上護衛大  
隊へ）  
・第四師団（海上飛行師団）  
飛行母船大隊、海上飛行大隊  
・船舶教導本部  
航海部（宇品）、砲兵部（宇品）、飛行部（鈴鹿）、潜水部（愛媛、  
後廃止）

それぞれの仕事は簡潔に言ってしまうところだ。

・上陸師団  
敵地への強行上陸を行う部隊  
・海上輸送師団  
帝国の各地へ物資を輸送する部隊  
・海上戦闘師団  
戦闘艦艇により、揚陸部隊や船団の護衛、沿岸や河川の警備を行う  
部隊  
・海上飛行師団  
航空母船を持って、揚陸部隊や船団の護衛、偵察や哨戒を行う部隊  
・船舶教導本部  
各師団へ配属される船舶兵の教育隊

陸軍船舶総司令部の設立経緯と歴史については、後日詳細を述べ  
るとしよう。

私は突如、大陸の工兵部隊から船舶総司令部 海上輸送師団に配  
属され、今こうして新型輸送船の警備司令部員として乗船している  
のである。

警備司令部員の仕事は、乗船している輸送船の指揮を取り、船員に対し司令部からの指示を出すというだけだ。

この船には他に、通信兵や砲兵が乗船し、それぞれが持ち場についている。

今回の輸送任務は、帝国海軍の海上護衛総隊と協同して、南洋のラバウル基地まで兵員や物資を輸送するというものであった。

海軍の最新式駆逐艦と小型空母に護衛された我々は、内地を出航し途中補給を行うトラック基地に向け、時速30kmという高速で航行していた。

そんな折、護衛の空母「摩周丸」から「敵潜水艦発見」の一報が入ったのである。

夜間だと言うのに、海軍の護衛隊は最新式の電波警戒機（電探、リーダーの事）を装備しているのか、これまでの海上輸送では考えられないほどの早さで敵潜水艦を発見し、周囲の駆逐艦が全速力で発見した方向へ航行して行った。

我々も船団指揮官であり、かつ「日進丸」の警備司令官でもある古谷大佐の号令一下、すぐさま回避行動を開始した。

しばらくすると、遠くで発砲炎が見え、続けて爆音が聞こえてきた。

敵潜水艦に攻撃を加えているのだろう。

戦闘はあつと言う間に終了した。

護衛の駆逐艦が戻ってきて、船団は何も無かったかの様に毅然と隊列を組み直し、一路トラック基地へ向かった。

船団はこの後、一度も会敵すること無くラバウルに到着し、今度は海上戦闘大隊の大型砲艇に護衛された我が「日進丸」は、内地へ

の  
帰  
路  
に  
着  
い  
た  
。

## 第2章 出撃！陸軍空母

昭和十七年三月

内地に帰港した私は宇品の司令部に出頭を命じられた。

何事かと思いつつも呉の港から宇品に向かうと転勤の辞令が下っていた。

辞令

田口嘉雄 陸軍少佐を海上航空師団勤務とし、特殊船「熊野丸」乗組を命ず。

帝国陸軍船舶総司令部

「特殊船」とは我が陸軍が世界に先駆けて建造した上陸用舟艇母艦であり、アメリカなんかでは「強襲揚陸艦」と呼ばれていると聞いたことがある。

「特殊船」は通常、揚陸師団に所属しているのだが、なぜ私が海上航空師団に配属されているのか、その時の私にはまだ分からなかった。

昭和十七年四月上旬

私は故郷、佐賀で一ヶ月弱の休暇を過した後、宇品の第二陸軍棧橋へ向かった。

もうすっかり暖かくなった広島駅を降り立ち、駅から通りがかりの将校車に乗せてもらい、棧橋に着いたのはいいのだが……



「おかしいな、ここは陸軍棧橋の筈だが……」

見渡す限り、私の目には数隻の航空母艦が見えるだけである。すると、困惑する私を呼びとめる者があつた。

「田口少佐殿でありますかっ!」

「そうだが」

「わたくしは『熊野丸』操舵員、海津上等兵であります!司令官のご命令で田口少佐をお迎えに参りました!」

彼は海津溪治郎、元々機甲師団の戦車操縦手であり、開戦壁頭の南方作戦での腕を買われて晴れて「熊野丸」の操舵手となつたのであつた。

「ちよつと聞いてもいいかね?」

私はたまらず彼に尋ねた

「はっ、なんでありますかっ!」

「我々の船はどこだい?」

「はっ、目の前にあります船が『熊野丸』でありますっ!」

「目の前って……これは海軍の航空母艦じゃないか」

すると海津操舵手は胸を張りながら

「いえっ！この空母型特殊船が少佐のお乗りになる『熊野丸』であります！」

私は一時、彼の言っている意味がわからなかった。

「この艦が我が帝国陸軍の船なのか？」

すると彼は先程よりも自慢げに

「そうであります！あちらに見えますのが『一番船』ときつ丸』であります！！」

そう、私が赴任した特殊船というのは、輸送船型のものではなく空母の形をした船なのであった。

「田口少佐は『あきつ丸』をご存知ありませんか？」

「ああ…… 名前だけなら聞いたことがある。」

彼は「熊野丸」の向かいに接岸している空母を指差した。

「あちらに停泊しているのが『あきつ丸』その横にあるのがその姉妹船『にぎつ丸』であります。この両船の任務は我が『熊野丸』と同様であります。」

私は奥にも泊まっている空母型船を見つけ彼に聞いた。

「あそこに見えるのも、特殊船かい？」

「いえ、あれは護衛空母『山汐丸』と『千種丸』であります。『熊野丸』とは違い、海軍の護衛空母を借りて運用しているものであります。」

私は彼の博識ぶりに少々驚きを隠せなかった

「君はずいぶん詳しいのだね」

「はっ！帝国海軍に負けない空母乗組員になれるよう、一生懸命勉強したのであります！」

私は少し頬をくずして

「そうか、それは良い心がけだ。しかし、我々が帝国陸軍軍人たることは忘れてはいかんぞ。では船に案内してくれ。」

「はっ！」

こうして、私は「熊野丸」上の人間となったのであった。

我が「熊野丸」について少々説明しよう。

「熊野丸」は帝国海軍が戦時標準型輸送船を元に新たに開発した「摩周」型空母を、大本営陸軍部第十課（船舶課）・船舶輸送司令部計画課・陸軍省運輸部・海軍艦政本部・帝国科学研究所が協同で試験的に特殊船として設計・建造したものであり、機関や航空艦装、兵装は海軍の物を踏襲しているが、その運用・管理は全て陸軍が行っている。

従来の「あきつ丸」などの特殊船は全て、運用自体は民間が行っていたのであるが、今回の再編から陸軍船舶を陸軍軍人が運用することも増えて来たのであった。

ちなみに私が陸軍棧橋で見た「山汐丸」は海軍が空母を陸軍に貸与しているという状態に近い。

「熊野丸」は陸軍船舶総司令部海上飛行師団飛行母船大隊第二中隊に属している。

第一中隊は「山汐丸」型二隻、第三中隊は「あきつ丸」型二隻が所属している。

これらの部隊は基本的には船団護衛の任に付いているが、揚陸師団が作戦を行う時は第二・第三中隊が参加することになっている。

「熊野丸」は最大で小型機約20機を搭載可能であり、蒸気式射<sup>ルト</sup>出基一基による短時間での発艦が可能となっていた。

また対空兵装として海軍の

・二式長十cm連装高角砲二基

・二式二十八連装対空噴進弾発射機二基

・二十五mm三連装機銃八基

対潜水兵装として陸軍の

・二式改中迫撃砲四基

・二式爆雷投下軌道二基

を装備していた。

全長は百六十五m、排水量は一万三千t（物資・舟艇満載時一万五千t）、機関は艦政本部式過給器付ジーゼル機関四基二軸の二万四千馬力、最大速力は満載時で時速三十八kmであり、揚陸機能の追加や陸軍仕様への改造により原型の「摩周型」空母より各部の性能が劣っていた。

また、陸軍船舶として初めて本格的な電波警戒機を備えており、敵の早期発見を可能としていたが、これは陸軍第五技術研究所（通信・電波兵器）が開発したのではなく、海軍の二式電波探信儀・二式射撃管制盤を陸軍仕様に改良した海式二号電波警戒機となっている。

次にもっとも重要な上陸用舟艇母船としての装備を説明しよう。この設備自体に関しては他の特殊船とほとんど変わらないが、この「熊野丸」はその全ての機能が改良されていると言って良いだろう。

熊野丸の全通式舟艇格納庫には大発動艇34隻を搭載することができた。

これは「神州丸」の大発16隻、「あきつ丸」の大発27隻と比べても、非常なる進歩と言えるだろう。

これら発動艇は、後部に開けられた扉から鉄製の軌道を伝って次々と発進され、そのまま素早い敵前上陸を行うことができたのである。

船腹の梯子を上り、「熊野丸」に乗船してまず思ったことは、その快適さであった。

新造船ということもあつたろうが、それまで輸送船に乗っていた私に取って、空母の士官室（軍ではガンルームと呼ぶらしい）や将校私室はなんとも優雅な物に見えた。

本来軍艦に快適など求めてはいけないうことくらい、私にも分かっていたつもりだが、それほど「熊野丸」は居心地が良かったのである。

熊野丸に乗船するとまず、私は副官室に通された。

執務室と寝室を兼ね備えた副官室には、洗面台や浴槽、洋式便器が備え付けてあり、これまた輸送船の士官室との差異に啞然としたものであつたが、

（これからしばらく、この部屋が私の寝ぐらとなるのか。）  
と考えると、何故だか胸に染み入るものがあつた。

私物を部屋に置いた私は早速、海津操舵手の案内で船橋に向かった。

やはり輸送船とは比べ物にならない多種多様な機器が並ぶ船橋は、

「さすが海軍さんの船だ」とただただ感嘆するしか無かった。

「熊野丸」の船長であり第二中隊司令官である江藤勇陸軍大佐は未だおいでになられていなかったが、間もなくいらっしやるというので私はそのまま船橋でお待ちすることにした。

船長が来られるまでの間、私は船橋で乗組員や「熊野丸」のことを見てみることにした。

船橋にいる乗組員は、海津操舵手の他に、副操舵手 青木一等兵、作戦参謀 北岡少佐、飛行参謀 高橋少佐、航海参謀 真嶋少佐、揚陸参謀 竹島少佐、砲兵長 今村大尉、普段は艦底にいる機関兵長 森田大尉、伝令兵の菊池上等兵という面々であった。

彼等は皆、他の師団や教導隊の訓練兵から選抜かれた精鋭達であり、私はこれから始まる戦いが楽しみでもあった。

私は司令副官として司令官を補佐し、戦闘時以外で船団の指揮を執るのが任務であった。

しばらくすると、甲板員が船内電話で船長が到着されたことを知らせてきた。

「江藤船長殿！只今棧橋にご到着！」

我々参謀一同は、甲板で船長を迎えるため、船橋を出て梯子へと向かった。

我々が陸軍式の敬礼をしつつ、船長の乗船を待っていると、我々の前に江藤大佐が現れた。

船長は我々の敬礼に答礼し、我々も腕を下ろした。

私は参謀を代表して船長に挨拶を行った。

「江藤大佐殿！副官参謀一同、お待ちしております！只今より

大佐殿を船橋にご案内致します！！」

船長は我々以下、全乗組員を飛行甲板に集合させ、訓示を行われた。

「諸君！我々は陸軍でありながら、今空母に乗船している。しかしながら、この『熊野丸』は只の空母ではない。帝国陸海軍が技術を結集させて建造した舟艇母船である！揚陸部隊の生命は我々が握っておるのだから、それを全乗組員が常に意識し、彼等の海の、空の防人となり母親となり、作戦を成功に導かねばならないのである。我々が作戦の要であることを十分に承知し、各々の任務に当たってもらいたい。以上！」

船長の訓示が終ると、私が号令をかけた。

「船長に向かってー、敬礼っ！」

乗組員達の一系乱れぬ敬礼を見届けると、船長は壇上から降りられた。

次は私からの訓示である。

「私が司令副官の田口だ。本船は明日、初の訓練みけいに出航する。瀬戸内海において航行訓練、射撃訓練を行い、松山に待機している飛行隊を收容する。これから諸君にとって『熊野丸』は家である。よって船長は家長であり、乗組員は家族である。自由時間には共に武技遊技を行っても構わぬ。許可のある時は身体を休めてもよろしい。しかし、一たび訓練や実戦となれば、身を粉にして、それぞれの任務に当たって欲しい、以上。」

「田口少佐にいい、敬礼っ！」

真嶋航海長や今村砲兵長、高橋飛行参謀による訓示や命令と続き、やがて解散となった。

翌日、ついに航海訓練が始まった。

「出航用意、錨上げ！」

航海長の号令のもと、乾いた音を響かせ錨が巻き取られてゆく。

船首には陸軍船舶司令部港湾部隊所属の曳船タッグボートが待機し、我が船の合図を待っている。

陸軍は相当前から曳船を保有しており、それぞれ救難艇や放水艇、砲艇などの設備能を備えた数多くの陸軍曳船が各地の港湾で活躍していた。

「曳船に連絡。牽引始め。」

曳船が動き出し、ロープがぴんと張りつめる。

「右舷前進微速、左舷前進半速。面舵」

「ウゲンゼンシンビソク、サゲンゼンシンハンソク。オモーカージ。」

機関がうなりを上げ、船体が離岸してゆく。

「両舷微速前進。舵戻せ。」

「リヨーゲンビソクゼンシン、カジチューオー。」



「熊野丸」後ろには「ときつ丸」が続き、縦列になって広島湾口に向かつて航行していた。

天気晴朗、波静か。訓練にはもってこいの天候であった。

### 第3章 洋上訓練

飛行隊の到着まではまだ時間があるので、砲兵長の提案で対空戦闘訓練を行うことにした。

瀬戸内海には、岩国・広島・松山・高松などの陸海軍飛行場があり、さらに海軍の水上機や飛行艇が連絡や訓練のためひきりなしに飛行している地域である故、訓練のための目標に困ることは無かった。

「電波警戒機に感、本船の西方五キロメートルに飛行機多数」

折よく船の方角に海軍の赤トンボ編隊（練習機）が近づいて来たので、これを目標に訓練を行うこととした。

「電波警戒室より船橋、敵機は船団の右三十度、距離一千。」

電波警戒室からの連絡に、すぐさま砲兵長が指示を出す。

「対空測高室、敵機の高度知らせ」

「敵編隊高度八百、進路変わらず」

「対空戦闘用意、測距器・測高器、射撃管制に移れ。」

砲兵長の指示により、甲板・右舷の高射砲・機銃が仮想敵機の方  
向へ砲口を向けた。

「敵機、進路変更左旋回、距離六百、高度変わらず」

「目標、本船右四十度、仰角二十八度、狙え」

満を持して砲兵長が叫ぶ

「ヨーイ、テエーッ！」

本来ならばここで各砲が火を吹き、砲弾が目標へ向かってゆくのである。

「目標撃破確認、残敵無し」

私がそう告げると、船内電話を耳に当てていた飛行参謀が報告してきた。

「松山飛行場より入電、『飛行隊、まもなく貴船に到着、着船準備求む。』であります。」

「高橋飛行参謀、飛行隊の収容準備を開始せよ。」

船長の命令一下、船内は急に慌ただしくなった。

着船制動柵の操作をする者、昇降機エレベータの稼動確認をする者、格納甲板の清掃を行う者。

しばらくして船は船首を風上に向け、速力を上げた。

収容準備はほぼ整ったと言って良いだろう。

すると、上空から爆音と言うのか、パラパラというエンジン音が聞こえて来た。

我が船団の「眼」である二式特殊偵察機と「鉾」<sup>ほこ</sup>である一式戦闘機五型のご登場だ。

両機とも、帝国陸軍がかつてより特殊船「神州丸」「あきつ丸」型などの搭載機として開発していた機体であった。

二式特殊偵察機は独逸第三帝国のシュトルヒ機を原型として、大改装前の特殊船から射出機無しで離陸できる偵察哨戒機として使われていた。

一方、一式戦闘機五型は、今戦争の初期に主力機として活躍し、現在は退役した「隼」戦闘機の改造型であり、当初から艦載機として開発していた四型の設計に改良を加え、戦闘爆撃の両者をこなせる複座の艦載機として既成の機体を改造したものである。

「熊野丸」はこの二式偵察機を6機、一式戦闘機を12機搭載していた。

「にぎつ丸」も同様の機数であるため、第二中隊飛行隊は総数計34機となる。

二式特殊偵察機の任務は、輸送や上陸に際する哨戒と潜水艦攻撃。一式戦闘機のそれは長距離偵察爆撃と敵攻撃機の撃破であった

雲間から現れた機体は瞬く間に大きくなり、それぞれが着船の準備を開始した。

まずは二式偵察機が、次に一式戦闘機が、船尾の指示員に従って次々と着船、制動柵により停止した機体はすぐさま昇降機に載せられ格納甲板へと収納された。

最後に着船した一式戦闘機から降り立ったがたいの良い男が、甲板横で着船を見ていた私の方へ白い歯を見せながら笑い顔で近づいてきた。

「いやはや、この『熊野丸』は何とも着艦のしやすいフネでありますな。『あきつ丸』と違って如何にも空母だ、という印象を受けましたぞ。」

自己紹介もせずには彼は、私に「熊野丸」の第一印象を語ってきた。

「おい、まずは貴官の階級名前を名乗るのが先ではないか？」

私が少し不機嫌に言うと、彼は「あっ」という顔をしてすぐに直立不動の姿勢をとり

「申し訳ありません！私は陸軍大尉の八巻飛行長であります！」

彼は八巻武丞やまきたけつぐ、熊野丸飛行隊長であり第二中隊飛行隊長でもある。

「よろしい。私はこの船の司令部参謀少佐、田口だ。我が船の主役は貴官達飛行隊だ。活躍を期待しているぞ。」

私の言葉に彼はさらに白い歯を見せながら

「当然であります！この船は我ら飛行隊が命をかけてお守り致します！ご期待下さい！！」

しかし、こんな会話が許されるとは、我が帝国陸軍も変わったものだ。

そう思いながら私は私室へのラッタル（階段）を降りた。

## 第4章 弾井海軍少佐

昭和十七年六月一日

いつになく呉の街が活気づく様に思えたこの日、「熊野丸」は宇品港ではなく柱島泊地に錨を下ろして物資の搭載作業に追われていた。

熊野丸の周囲には姉妹船「ときつ丸」の他に、第一中隊の「あきつ丸」「にぎつ丸」、第三中隊の「山汐丸」「千種丸」、そしてしばらく仏印方面に従事していた陸軍空母の元祖「神州丸」も浮かび、ここに事実上全ての陸軍空母が集結していた。

また、揚陸師団の甲型特殊船「摩耶山丸」「吉備津丸」、M甲型特殊船「摂津丸」、乙型特殊船「高津丸」などをはじめとした陸軍船舶が停泊し、戦争初頭の南方作戦以降初めてと言える集結であった。

この二週間ほど前

訓練を終え、任務についた我々は、「ときつ丸」と共にしばらくの間マリアナ・ニューギニア方面の輸送に奔走し、その輸送能力を活かしてトラック基地やラバウル基地に航空機や銃砲を届ける日々が続いていた。

そんな中、

「どつやらミッドウェイというアメさんの基地を陸海軍共同で攻撃

するらしい。」

という噂が陸軍船舶隊内でささやかれていた。

まあ我々は関係ないであろうと考えていた矢先、宇品の船舶司令部から全海上航空師団に対し集結命令が発令され、我々は急遽ニユーギニアのウエワク基地を引き上げ、内地へと向かった。

昭和十七年五月十八日

熊野丸は宇品陸軍棧橋で病傷兵や民間人を下船させた後、総司令部からの命令で呉軍港柱島泊地に錨を降ろした。

私は海軍の軍艦を横目に総司令部所属の伝令艇（内火艇）で宇品の船舶総司令部へ向かった。

私が司令部に到着すると、揚陸師団や海上飛行師団の幹部をはじめ、国防府や海軍の連合艦隊からもお偉いさん方が来ていたため、第一会議室はいつに無く物々しい空気が流れていた。

私はこの面々を見た時、すぐに

（これは、例のミッドウェイに関するものではないか？）  
と感じたものであった。

すると、船舶総司令官鈴木宗作中将が入室され、続いて初見の海軍少佐が入って来た。

船舶司令部がまだ船舶輸送司令部という名前であった頃は、長く佐伯文郎中将が司令官を務めていらしたが、今回の陸軍再編で佐伯中将は国防府陸軍部第十課長に任命せられ、船舶総司令部の司令官

には鈴木宗作中將が就任なされたのであった。

ざわついていた室内がしんと静まり返ると、中將は皆を見直し、ゆっくりと口を開いた。

「今回、貴官達に集まってもらったのは他でも無い、次の作戦についての説明を行うためである。この作戦は、帝国の命運をかけて陸海軍が共同で行う重要な物である。詳しくは、海軍の弾井少佐から説明してもらおう。諸君は心して聞いてもらいたい。では弾井少佐、説明を。」

すると、若い海軍少佐は中將と我々に一礼してから口を開いた。

「私は帝国科学技術研究所の弾井と申します。我が帝国陸海軍は連合軍と雌雄を決すべく、近日中に北太平洋に於いて一大攻勢作戦を行う事を決定し、陸軍部隊として貴方がたの参加が下令されました。詳細はこれからお配り致します資料に記してありますが目標はサント島、イースタン島から構成される米領ミッドウエー島であり、敵守備兵力は航空機百三十機、陸兵三千名程と思われます。

これら敵戦力は我々海軍が事前に徹底的に叩き、無力化致しますので陸軍は残敵を掃討しつつ上陸作戦を行って頂きます。

各隊の割り当て等は、お手元の資料をご覧ください。また質問は各隊ごとにまとめて、後ほど提出願います。以上です。」

やはり、予想していた様に我々はミッドウエイ攻略のために、ここに招集を受けたのである。

会議室は一瞬ざわついたが、意気込む者、目をつむる者と、それぞれが意を決した様であった。

続いて鈴木司令が訓辞を述べられ、会議室を後にされると、会議室には再び元のざわめきが戻っていた。



いつの間に退出したのか、例の海軍少佐はすでに我々の前から姿を消していた。

同期の司令部員から、広島市内で美味しい料亭が有る、と食事に誘われたが、私は熊野丸が錨泊してすぐにこちらに来たため、船に多くの仕事を残していることから、彼等の誘いを断って、一人ぶらぶらと棧橋へ向かうことにした。

そして私が司令部庁舎の入口に差し掛かった時……………

パァーン！

一発の銃声があたりに鳴り響いた。

目の前をあの海軍将校がのけぞりながらゆっくりと倒れていった。

一瞬、時が止まった様な空気を感じた。

そして弾井少佐を襲った襲撃者とはどめを刺すため、ゆっくりと拳銃を彼の頭部に向けた……………

(これはいかん！)

「貴様ーッ！何をやっとなるかーッ！」

私は叫びながら従兵、衛兵と共に襲撃者を取り押さえにかかり、私は軍刀の柄で彼の後ろ首を一撃、彼は気を失ってバタリと倒れた。

私は衛兵に応援を呼ぶ様に指示し、私は弾井少佐の容態を確認した。

何故だかわからないが、彼は胸に銃弾を受けたのにも関わらず、出血もせず、気を失っているだけであった。

庁舎から軍医官や兵が駆けてきて、弾井少佐は担架で医務室へ、少佐を襲った兵隊は憲兵本部に連行されて行った。

## 医務室

なんて強運な男なのだろう。

彼はかすり傷一つと負っていなかった。

彼の胸には高級なシガーケースがあり、銃弾はそぞ真ん中に突き刺さっていたのだ。

気を失っている彼の枕元にあるへこんだシガーケースを眺めながら私は考えていた。

「うっ……」

弾井少佐が気付いた様だ。

「……は……？」

彼は自分に何があったのかわからない様であった。

「気分はどうですか」

「貴方は……………」

「私は船舶飛行師団『熊野丸』司令部副長の田口です。私が司令部から出た時に、目の前で貴方が撃たれたのですよ。」

「そうでしたか……………ウツ……………」

「余り無理をなさいますな。横になっていて構いませんよ。発砲した者は貴方にとどめを刺そうとしたところを私が取り押さえました。現在広島の憲兵本部で取り調べ中ですが、どうやら統制派の連中が臭いますな。」

「それは……………ありがとうございました。」

「いやいや、こちらこそ帝国陸軍と同じ陛下の皇軍である海軍さんを襲うとは、まことに申し訳ない。」

私が頭を下げると、弾井少佐は一瞬私から目をそらし、何か考え、再び私の方を向いた。

「私は……………以前も襲われたことがあります。その時はこんな形ではありませんでしたが、あの時も陸軍でした。」

私は弾井少佐に対して何も言えず、ただこうべを垂れているしか無かった。

しばらくの沈黙が流れ、耐えきれなくなつた私は弾井少佐に尋ねた。

「なぜ……狙われていらつしやるのですか？よろしかったら教えてください。弾井少佐。」

彼は、自分は帝国の将来を案じていること、人命軽視や精神主義の問題性、そしてこの戦争の行く末を私に語つた。

確かに、我が帝国陸軍は昔から過激な考えが多かつた。

相沢中佐事件や二・二六など、数えたらきりが無い。

またそれらの事件が、日本を大東亜戦に導いた原因の一旦であるとも、私は密かに思っていた。

そして何より、我が帝国陸軍は何にしても極端で、非合理的である。

私は幼年学校に入学してから、士官学校を出るまで、軍人精神を叩き込まれて育つたが、士官学校で学ぶうちに陸軍の戦法や精神に些かの疑問を持っていた。

敵は幾万ありとても  
全て烏合の勢なるぞ

と言われ続け、勿体無いから銃弾を使うな、突撃すれば敵は怯む、作戦なんぞ弱者のやるものだと教えられた。

支那事変、否、日清戦争ならばそうであつたかもしれない。

しかし、今我々が戦っているのは巨大な英米である。

工兵部隊から船舶隊に来て、船員や海軍の合理主義や先進性にじかに触れ、その疑問は日に日に確実な物になっていた。

そして今年に入り、陛下直々の政変や人員整理、そして陸海軍部署の統廃合が行われて、帝国は変わった。いや私がそう感じただけなのかもしれない。

しかしこの弾井という男を見て、私はこの男は帝国を変える人間なのではないかと、理由も無く感じたのである。

この男の持つ不思議な雰囲気を感じているうちに、いつの間にか私は自分の疑問を彼に語っていたのであった。

私が先の疑問や本音を語るうち、弾井少佐の表情は明らかに変わって行った。

彼は、堰を切った様に語り始めると、たまっていたものを吐き出すが如く陸軍への文句や体質の問題を述べた。

私はただ黙ってじつと彼の言葉を噛み締めていた。

彼は一通り話し尽すと、はっと我に返った様に

「あつ……………申し訳ありません……………。陸軍の田口少佐を前にしてあんななことばかり……………」

私は首を横に振り

「いやいや、構わないのです。弾井少佐のおっしゃる事は全てもつともな事でしょう。それに、海軍さんには貴方の様な素晴らしい考

えの持ち主がいて羨ましい限りです。」

はその軍人らしからぬ端正な顔を赤らめて

「そんな……めっそうもありません……。田口少佐、今は何時でしょうか。」

私が左腕の時計を見つつ「午後五時丁度です」と伝え、身体の具合は如何かと尋ねると、弾井少佐は寝台から身を起こして

「ずいぶんお邪魔してしまいました……。お陰様で身体の方はもうすっかり良くなりました。皆が心配しているだろうし、そろそろ司令部に戻らないと……。」

私も椅子から腰を上げ

「実は私も、今から柱島の船に戻らねばならので、こちらの車で呉までお送りしましょう。」

何故だかわからない、しかし私は彼とまだしばらく語り合いたかったのだ。

彼は少し躊躇してはいたが、思い直した様に

「これ以上田口少佐にご迷惑をかけるのは本当に申し訳ない気持ちでいっぱいですが、お言葉に甘えさせて頂きます……。」

私は従兵に車を用意する様に伝え、数分後我々は船舶総司令部の用意したカーキ色の豊田AA型乗用車上の人となっていた。

車内においても話しは尽きず、私と弾井少佐はいつの間にか意気投合しているのであった。

車が呉軍港の棧橋に到着し、我々は車を降りた。

弾井少佐は私に右手を差し出した。

「私は今まで陸軍を誤解していました。理不尽で横暴な方ばかりと思っていた先入観は今日で変わりました。

田口少佐の様な理性的で責任感があり、そして何より人命を大切に  
する将校もいるのだと知り、帝国陸軍にも希望があると、私はそ  
う感じました。

私は連合艦隊司令部で、田口少佐は熊野丸、別々の場所ではあり  
ますが目指す所は同じ。共に帝国の未来のために任務を尽しましよ  
う。」

私は彼の手を握り返し

「こちらこそ、貴方の様な素晴らしい軍人に出会えてよかった。私  
の考えは間違っていなかったのだと、確信することができました。  
私は陸軍でまだ肩身の狭い日々が続きますが、弾井少佐は海軍に  
いらっしやる。ぜひ陸上からその信念で我々を勝利に導いて頂き  
たい。」

弾井少佐のご武運を祈り申し上げさせて頂きます。」

彼は胸に自信と信念を秘めて

「いえいえ、私も田口少佐の武運長久を祈っております。では。」

そうして我々はそれぞれの目的地へと足を進めた



## 第5章 二式中戦車

昭和十七年五月二十日

目の前をソビエト軍の様な大型戦車が吊り上げられて行くのを、私は目を丸くして眺めていた。

呉港から熊野丸装載の伝令艇に乗り、私が母船に帰った時、船の積載作業は佳境に入っており、強力曳船に曳航された数隻の大団平船には加農砲や迫撃砲、戦車などが積みまれ、デリックで船内へと積み込まれている最中であつた。

船へ戻つた私は、船橋で議事報告と作戦の説明を終わらせ、飛行甲板でしばらく積載作業を眺めていた私の目の前、その巨大戦車が現れたのだ。

九七戦車、良くて一式戦車を持って行くのだろうと考えていた私は、その初めて見た戦車に仰天したのである。

「あれは、二式中戦車チヌであります。」

いつの間にか、私の横には博識の海津操舵員が立っていた。

「アメさんの戦車に対抗するため、海軍が二式戦車として開発したもので、先日になって陸軍でも二式中戦車として制式採用されたものであります。」

確か陸海軍再編に対する叛乱の時に、かの辻参謀がチ八車の砲で二式戦車を攻撃したけれども、簡単に弾き返してしまつたとか・・・」

陸軍が空母を作っている時に、海軍は独自に戦車を作っていたというのか。

非合理すぎる。帝国陸海軍はあまりに非合理すぎるとしか思えない。

辻参謀がどうのという話題よりも、私はそんなことを考えあきれ返っていた。

それに、海津上等兵はなぜこんな軍機物であろうかについて詳しいのであろうか。

少しの疑惑と不審が頭に浮かんだが、そんなことを考えている暇など無かった。

「山汐丸」には陸軍工作船が横付けし、最終的な整備が行われ、「あきつ丸」では既に発動艇の搭載が始まっていた。

兵器の搭載を終えた強力曳船と大団平船が熊野丸から離れると、船尾の観音開の格納扉が轟音を立てて開帳し、格納用滑走台が姿を現した。

いよいよ上陸戦の横綱、発動艇の登場である。

無数の見慣れた大発動艇が綺麗な隊列を組んで近づくと、見慣れぬ大型発動艇が数隻、一際異彩を放っていた。

「海津操舵員、あれはなんだ」

彼は眉間に皺を寄せ、あまり見ない様なしかめ面をしていた。

「申し訳ありません。あれは私もさすがに分らないであります…

…。ただ、大きさを察するに、先程の戦車を搭載するのではないかと考えるものであります。」

「ほう……あんな大きなものをわざわざ上陸に使用しなければならんのかね……。確か海軍の水陸両用戦車も参加していたはずだが……」

「我々陸軍に対する当て付けでしょうか……」

私は険しい顔つきの海津操舵員の肩を軽く叩き

「ハハハ、それは無いだろう。あの弾井少佐のことだ、アメさんを倒すには圧倒的な戦力が必要だということだろう。」

弾井少佐のことを知らない海津操舵員の怪訝な顔をよそに、私は晴れた広島空を仰ぎ見た。

上空を、第一部隊の一式戦が飛んでゆく。

その先では連合艦隊の大戦艦や空母がその雄姿を誇っていた。

私は飛行甲板を後にして、船橋の司令室に戻った。

誰も彼もが齷齪あくせくと忙しく動き回り、機器機材の入念な確認をしている最中であつた。

かの戦車は既に団平船からデリックで搭載されていたため、代わりに物資弾薬を大量に積んだ大型発動艇　竹島揚陸参謀によれば「大発動艇F型」と言うらしい　に続いて、陸戦隊の兵員や軍属を載せたお馴染みのD型大発動艇が、滑走台から次々と搭載されて

ゆく。

滑り台によって効率的に搭載発進を行うとは、陸軍ながら良く考えたものだと、私は今更ながら考えていた。

この作戦は、陸軍船舶部隊が総出で行う今戦争では最大の上陸作戦であつて、陸軍船舶史上最大規模の輸送船百七十七隻、十一万人が参加した杭州湾上陸戦はもとより、支那事変における太沽上陸戦・バイアス湾上陸戦、今戦争におけるマレー上陸戦・スラバヤ上陸戦などの戦闘を踏まえた作戦であり、海上戦闘師団や海上飛行師団のその多くの戦力が揚陸師団の指揮下に入り、今作戦に挑もうとしていた。

司令部船である「神州丸」には装甲艇・駆逐艇・高速艇と言つた戦闘師団の舟艇が搭載され、我々の船にも特殊発動艇や大発動艇といった舟艇が搭載されている。

海軍の潜水艦部隊は既に出航せんという具合であり、連合艦隊の主力艦隊と我が陸軍船舶部隊の作戦準備も、そろそろ佳境に入つていた。

## 第6章 ミッドウェイ作戦

昭和十七年五月二十四日

本作戰に参加する陸軍船舶兵の将校の全てが司令部船「神州丸」に召集された。

なぜ「招集」ではなく「召集」なのか。

恐れ多くも今上天皇陛下がこの作戦の為に御勅語を下さったと言  
うのだ。

飛行甲板から周囲を見回すと、既に他の部隊の各船や舟艇の船長・  
艇長以下将校が次々と「神州丸」へと集まっていた。

私も当直将校を除いた船長の江藤大佐、北岡作戦参謀、高橋飛行  
参謀、竹島揚陸参謀、八巻飛行長ら幹部と共に伝令艇に乗り込み「  
神州丸」へと向かった。

私が「神州丸」に着いた時には、かつて飛行機格納甲板であった  
司令部大会議室は将校たちで埋め尽されていた。

ふと私の肩を叩く者がいるので、振り向くとそこには一人の海軍  
士官が立っていた。

「君が、田口少佐かな。」

「はあ、そうですか……………」

海軍士官はにやりと笑って。

「ワシは連合艦隊司令部の黒島じゃ。弾井君を助けてくれたお礼を言いたくてのお。陛下のお言葉を奏する事のついでに、君に会いに来たんじゃ。」

「そうでしたか！あの件につきましては、海軍の皆様にはご迷惑を……」

「まあまあ、そう堅くならんでも良い。あの犯人の統制派も、軍法会議で相当絞られたようだし、それに安心しきっていた弾井君にも責任はあるじやろうに、君がそんなに謝ることでは無いじやろうて。弾井君も君には本当に感謝しておつてな、弾井君に陛下勅使の任がなければ一緒に来ていただろうに。」

「えっ、弾井少佐は陛下の勅使をされているのですか……」

弾井少佐が勅使とはどういうことであろうか、私にはさっぱり考えがつかなかった。

「まあまあ、そんなことは気にせんでええ。弾井君は海軍に、いや帝国にとつて失つてはならん者じゃ。陸軍は海軍にまた借りを作つたが、海軍は君に一つ借りを作ってしまった。」

「いつか機会があれば借りを返さして頂くよ。じゃあわしは陛下の御言葉を奏さなきゃならんから、これで失礼するよ。」

私の陸軍式敬礼を、海軍式敬礼と苦笑いで返すと黒島大佐は司令部のお偉方の並ぶ方へと去っていった。

しんと静まり返ったかつての飛行格納甲板で、司令官による訓示が始まった。

司令部参謀の号令で、我々が一系乱れぬ直立不動の姿勢になると、揚陸部隊総司令官の伊藤忍少将が壇上へと登られた。

「諸君、この度の大決戦に鑑み、恐れ多くも天皇陛下より御言葉を頂いた。今から連合艦隊司令部先任参謀、黒島大佐に奏じて頂くから、諸君は謹んで拝聴する様に。」

続いて黒島大佐の紹介がなされ、先程の海軍士官が壇上へと登られた。

黒島大佐は一つ咳払いをすると、持参した書簡を広げ、大きな声で読み上げられた。

「天佑を保有し、萬世一系の大日本帝国天皇は昭に忠誠勇武なる全將兵に示す。

帝国の安定を確保し、以て今北太平洋の戦に望みて、朕が陸海將兵は全力を奮いて交戦に従事し、朕が百僚有司は励精職務を奉公し、総力を挙げて征戦の目的を達成するに遺算なからむことを期せよ……」

私を含めた将校は皆、溢れんばかりの感激で、身体震わし、また目に涙を浮かべていた。

黒島大佐は御言葉を奏し終わると、再び書簡丁寧に折りたたみ、神妙な面持ちで伊藤司令官へと手渡された。

私はふと船窓から外を見た。

視界一面に広がる陸海軍の艦船は、今こそ出航の時を迎えようと

していた

昭和十七年六月六日

午前八時

広島の高く海軍軍楽隊の演奏する「軍艦行進曲が」鳴り響いた。

第一艦隊旗艦「大和」のマストに一&a m p ; # 2 6 0 5 6 ; の信号がスルスルと揚がった。

「旗信！全艦、予定順序に出航せよ！」

柱島錨地に錨泊する戦艦「大和」を中心とした第一艦隊、空母「赤城」を中心とした第一機動艦隊の艦艇が一斉に錨を揚げた。

「出航！」

軍楽隊の演奏に合わせて、橋本少将率いる第一艦隊第三水雷戦隊旗艦「川内」がゆっくりと動き始めた。

「川内」後方には第十一駆逐隊の「吹雪」「白雪」が続き、クダコ水道への先頭を切った。

第三水雷戦隊の第十一・第十九・第二十駆逐隊十二隻には五藤少将の第六戦隊「青葉」「衣笠」「加古」「古鷹」が続き、第九戦隊「北上」「大井」が続く。

そうして遂に私と同郷佐賀軍人である大川内中将の第一戦隊「大和」「長門」「陸奥」の三艦が巨体を揺らしつつ動き始めた。



演奏は既に「軍艦行進曲」から「連合艦隊行進曲」に移っていた。

「大和」を中心とした第一艦隊が縦列に柱島を離れると、第一機動艦隊の第十一水雷戦隊「秋月」型八隻、「追風」を旗艦とする第六水雷戦隊の第二十九及び第三十駆逐隊八隻が出航。

続いて栗田中将の第七戦隊「最上」「三熊」「鈴谷」「熊野」、阿部少将の第八戦隊「利根」「筑摩」、近藤中将の第三戦隊「金剛」「榛名」「比叡」「霧島」が堂々の進軍を始めた。

軍楽隊が「敷島艦行進曲」を演奏し始める頃、

第一航空戦隊の「赤城」「加賀」のボイラーが唸りを上げた。

小沢中将の指揮する第一航空戦隊「赤城」「加賀」、第二航空戦隊「蒼龍」「飛龍」、第五航空戦隊「翔鶴」「瑞鶴」が単縦陣で進んでゆく。

私は陸軍軍人である。

しかしまた、船乗りでもある私には、これら鋼鉄艦の雄壮な堂々たる行進に、感激以外のものを覚えることは不可能であった。

軽巡「川内」を先頭に、十四ノットで進む戦艦・空母・巡洋艦……

私は飛行甲板から振り切れんばかりに帽子を振りながら。

「この作戦、我に天佑あり！」

そう確信した。

昭和十七年六月七日

「出航！微速前進！」

角田中将座乗、第二機動艦隊旗艦「龍驤」の塙楼に出航旗が揚がる。

「全艦出航用意！錨揚げ！」

続いて三川中将率いる第二艦隊旗艦「高雄」のマストにも信号旗がなびいた。

「熊野丸」の揚錨機が轟音を立てて回り始める。

ゴトンゴトンと錨鎖が巻き揚げられ、海中から次第に錨が見えて来た。

「旗信！全艦出航せよ！」

司令部船「神州丸」のマストに旗りゅうゝが揚がる。

第二機動艦隊が出航を開始した。

大森少将の第一水雷戦隊旗艦「阿武隈」に続き第二十一駆逐隊「若葉」以下、第二十四・二十七・二十九駆逐隊十六隻が進む。

続いて戦闘機のみを搭載した異色の空母部隊である角田少将率いる第三航空戦隊「祥鳳」「瑞鳳」、第四航空戦隊「龍驤」「隼鷹」が出航。

続くは遂に待ちに待った我々<sup>しんがり</sup>殿軍は第二艦隊の出航である。

田中少将率いる第二水雷戦隊の旗艦「神通」、第十五・十六・十八駆逐隊の「早潮」「雪風」ら十二隻、西村少将第四水雷戦隊「由良」率いる第二・第九駆逐隊八隻が出航。

その巨大な艦橋建築物がなんとも頼もしく、また雄壮で、しかしながら美しく洗練されている第四戦隊の「高雄」「愛宕」「摩耶」「鳥海」、高木中将揮下率第五戦隊「妙高」「那智」「足柄」「羽黒」が出航。

我々、陸軍船舶部隊の出航も間近、船橋は張りつめた空気に支配されていた。

第二艦隊の主力が出航すると、宮本大佐率いる第十六掃海隊「第二玉丸」他三隻、哨戒艇・監視艇・魚雷艇などに護衛された藤田少将揮下第十一航空戦隊の水上機母艦「千歳」「千代田」「神川丸」「君川丸」が出航した。

司令船「神州丸」が轟音の如く汽笛を大鳴せしめた

「両弦半速前進！神州丸に続け！」

船長が叫ぶ

「リヨーゲン、ゼンシンハンソーク」

海津操舵員が復唱する。

伝声管からも森田機関兵長の復唱が聞こえた。

汽笛が鳴る

機関が唸りを上げる

ゆつくりと「熊野丸」は動き出した。

我が船に続いて「ときつ丸」や「あきつ丸」も出航し、ここに陸軍船舶部隊は勇壮な海の行進を開始したのである。

攻略部隊の神州丸以下、山汐丸・千種丸・あきつ丸・にぎつ丸・熊野丸・ときつ丸・摩耶山丸・吉備津丸・日向丸・撰津丸・日進丸・千代田丸・佐賀丸・東海丸の後方には、給油船の鳴戸・佐多・鶴見・東栄丸・東亜丸・東邦丸・極東丸・神国丸・日本丸・国洋丸・玄洋丸・健洋丸・日栄丸、給兵船の日朗丸・第二共栄丸・豊光丸が続い

た。

最後に工作艦「明石」と病院船「ぶゑのすあいれす丸」が出航を終えると、柱島の泊地はもぬけの空となった。

嗚呼、堂々の輸送船団は、クダコ水道を抜けると速度を増し、海軍に護衛されつつ、一路中部太平洋へ向かった。

## 第7章 新生ノ陽八登レリ

柱島泊地が主の居ない巢と化してから数時間、我々は豊後水道を抜けて既に太平洋の大海原へと駆り出していた。

第四戦隊を先頭に、先行する第十一航空戦隊は輪形陣を組み、第二水雷戦隊が艦隊を取り囲んでいる。

我々、陸軍船舶部隊と補給部隊は二列縦陣で進み、その周囲を第四水雷戦隊と第十六掃海隊がかこみ、敵潜水艦から護るために忙しく行き来していた。

我々の右前方には第二機動艦隊の空母群が輪形陣でがちりと艦隊を組み、搭載の戦闘機が離発着をしては時たま我々の方へ飛来していた。

我々も負けじと、「山汐丸」「千種丸」を中心に戦闘機を発艦させて海軍部隊と張り合っているのである。

「熊野丸」はそんなことには我れ関せずというかの様に、二式特殊偵察機のみを発艦させて対潜哨戒を黙々と行っていた。

「こちら電信室！船橋へ、連合艦隊司令部より電信！！」

船橋の空気が一瞬にして引き締まった

「こちら船橋、電信室読み上げる。」

「発 連合艦隊司令長官山本五十六、宛 全部隊、〆本日、新生ノ

陽八登レリ。』以上！』

「ついに来たか！」

北岡作戦参謀が声を上げた。

「新生の陽は登れり」

全部隊に対して定められたミッドウェイ作戦発動の秘匿電文である。

「船内放送で全将兵に通達する。田口少佐、伝声器の用意を。」

船長からの指示に、私は船橋の電気伝声器の電源を入れた。

「船橋より全乗組員及び乗船中の将兵へ。先刻連合艦隊司令長官より入電があった

『新生の陽は登れり』

当入電により、全部隊においてM I作戦は開始された。これより我が艦隊及び船団は中部太平洋に進出し敵艦隊を撃滅、同時に敵拠点に上陸、これを殲滅せんとす。

我々陸軍船舶兵は上陸戦の専門職であり決して素人ではない。乗船中の陸戦隊員においては、貴官らが上陸地点に到達するまで、我々は命をかけてその任を遂行するものである。

貴官らは安心して上陸に備えて頂きたい。本作戦は大日本帝国の将来その全てがかかる作戦であることは間違いない。各員、一層の努力を期し陛下の御前に恥じぬ戦果を挙げよ。」

上陸部隊が寝泊まりしている下部兵員室から、凱歌が上がった。

我々も互いに顔を見合わせ、それぞれの意思を再確認するものであった。

六月十三日午後一時半

先行の小沢機動部隊から敵空母に向けて四百機弱の大航空部隊が発艦した。

我々はまだ戦闘海域には達せず、引き続き哨戒に専念する一日が続いていた。

太平洋の波は珍しい程に穏やかで、こんな平和な大海が、数時間後には人が必死に殺し合う決戦の舞台となるのかと思うと、私の心をこの海の如く穏やかにすることは至難の技であった。

既に第一機動艦隊が艦載機を出撃させ、戦闘は開始されている一方、我々の船団は未だ順調に船を進めていたのだが……

敵発見の報は突然であった。

ジリリリリ

船内電話の呼び鈴がなった

私はすぐさま受話器を取った

「こちら船橋、どうした」

「こちら電波警戒室、警戒機に敵潜水艦らしき感あり！本船より三



十度、距離千！」

私が受話器を置くと見張員が叫んだ

「旗信！『二式偵察機ヲ発艦シ敵潜水艦ヲ撃破セヨ』以上！」

船橋は一瞬にして慌ただしくなった

高橋飛行参謀が叫ぶ

「偵察機発艦準備、装備は対潜爆雷、他の船に遅れを取るな！」

船は速度を増した。

便利な物で、射出機と二式偵察機の滑空性があれば、船を風上に向ける必要はない。

飛行甲板は大騒ぎである

整備兵が走り回り、操縦士が叫ぶ

「ペラ回せ！」

「コンターク！」

再び呼び鈴が鳴る

「こちら飛行甲板、発艦準備完了。」

飛行参謀が受話器越しに叫ぶ

「偵察機、発艦せよ!!」

旗を持った指示員が満を持して旗を振り下げた

バラバラバラ……………

シューッ

飛行甲板の2機の二式偵察機が射出機を使って飛び立ち、敵潜水艦へ真一文字に向かった。

他の船を見ると「熊野丸」とほぼ同時に飛行機が飛び立っていた。

どうやら発艦競争は次回への持ち越しの様である。

その時、電信室から緊急連絡が入った。

「こちら電信室、敵潜より発信せられた電文らしき通信を傍受。内容読みます、『敵輸送船を含む大艦隊を発見せり。サンド島より二百七十度、進路九十度、速度約十九ノット。』以上。」

(これは敵機が来るかもしれんぞ……………。第二機動艦隊は本隊の支援で手一杯、いかん、これはいかん。)

そう直感した私は、受話器を切るのもままならぬままに船長に提言した。

「司令、いま敵潜水艦が我々の位置をミッドウェイに報告しました。」

潜水艦は我が偵察機が必ずや撃破してくれるでしょうが、ミッドウェイが敵空母部隊からの攻撃隊が来襲する恐れがあります。

偵察機が帰還したら直ぐに戦闘機を飛行甲板に揚げられるよう全ての準備を終了させる様に、格納甲板に指示した方が良いでしょう。

「

私の進言に江藤船長は深く頷くと、直ぐに準備を完了させるよう高橋飛行参謀に指示を出された。

私のこの判断が、攻略部隊の運命を勝利に導くのであった。

「偵察機、攻撃開始します。」

敵潜上空に一番乗りを上げたのは、「あきつ丸」飛行隊であった。

緩降下から投下された二発の爆雷は、急速潜行中の敵潜水艦の至近弾となって爆発。

撃沈には至らなかった。

次に攻撃を仕掛けたのは我らが「熊野丸」飛行隊である。

ぎりぎりまで降下した二式偵察機は、既に海中に潜り輪郭が消えかかっていたであろう海上に、各2つの爆雷を投下した。

ドドドーン

大爆発音が聞こえ、巨大な水柱が上がった。

二式偵察機から無線が入る。

「我が爆雷は敵潜水艦に命中！海上に油、浮遊物確認！撃沈確実！」

各所で歓喜の声が上がった。

しかし私は、敵潜水艦が発信した電文が気になって仕方が無かった。

(我が海軍部隊との戦闘に夢中になって、我々を無視してくれれば良いのだが……)

敵潜水艦攻撃は、我々熊野丸に軍配が上がったようであった。

二式偵察機が帰艦すると偵察機とその搭乗員を整備員や砲兵が大喜びで出迎え、また偵察機搭乗員もその歓声に手を振って応えていた。

しかし、その歓喜もつかの間、飛行甲板にはジリリとベルが鳴り響き、偵察機の収容と戦闘機の甲板待機のため、再びてんやわんやの大騒ぎとなった。

一方、我々を護衛してくれている第二艦隊から、海軍本隊の情報が続々と入って来ていた。

どうやら状況は優勢のようだが、第二機動艦隊の戦闘機も支援に向かうので手一杯であり、我々の方には必要最低限の機数しか残されていなかった。

午後四時一五分

先頭に行く軽巡洋艦「由良」から全部隊に向けて緊急電が平文で打電された。

「こちら電信室！軽巡『由良』より緊急入電！『我が電探に敵大型機らしき感あり、方位九十、距離三千、数十二』以上！」

(そら来た！)

間髪入れず、船橋の見張り員が叫んだ。

「神州丸檣楼に旗信！『敵機を迎撃せよ』！」

私が江藤船長を見ると、船長は軽く頷き大声で命令を発された。

「戦闘機、全機発艦せよ！」

私は船橋を降りて戦闘機隊長八巻大尉の肩を叩いた。

ようやくの出番だと意気込む大尉は、私に気づくと同時に敬礼をし、私もまた彼に敬礼を返した。

「八巻大尉、やっと君達の出番が来たようだ。我々は特殊船と言えどたかが輸送船だ。爆弾をくらったら船は大破し下にいる兵隊にも多くの死者が出るだろう。」

君達がこの船団を守ることがこの決戦の勝利に繋がる。臨機応変に対応して敵を阻止し、絶対に生きて帰って来い。」

「もちろんであります！我々戦闘機は必ずや船団を守って見せましよう！」

八巻大尉は再度私に敬礼をすると、自らの機体へ向かい、私は船橋へのラッタルを駆け上がった。

十二機の一式複戦がズラリと飛行甲板に並び、一斉にエンジンを始動、プロペラが回り始めた。

電話機が鳴る

「発艦準備完了！」

船長が頷く

「発艦はじめ！」

飛行参謀が叫び終ると同時に戦闘機は次々と飛び出した

「頼むぞ！」

「全部撃墜して来てくれよ！」

甲板両側に陣取る整備兵が口々に叫び、戦闘機はそれに応えるが如くの勇姿を見せて飛び立って行った。

周囲を見渡すと、戦闘機が発艦しているのは我々だけ。

他の船や海軍の水上機母艦は今になって発艦準備に追われているのだ。

今回ばかりは、発艦競争は我々の圧勝であると言わざるを得ないだろう。

当然ながら、真つ先に敵爆撃機に接敵したのは我が熊野丸飛行隊であった。

続いて「千代田」所属の二式水上戦闘機部隊十機が参加した。

翼間をぎりぎりまで狭め、密集体型を取る空の要塞を攻撃しようとしたその時、我が戦闘機隊がB17隊の後方遠くに、二十機ほど

の編隊を発見した。

「熊野丸、こちら戦闘一番、B17後方に敵編隊と見られる別の編隊を発見！敵は小型機の模様……」

当編隊の速度や大きさから小型爆撃機と判断した高橋参謀は、我が戦闘機をこれに向かわせることを提案、B17は他の戦闘機部隊に任せ、我々は小型爆撃機の相手をすることにした。

敵小型爆撃機はミッドウェイ所属のSBDドントレス、米軍の代表的な艦上爆撃機だ。

八巻大尉率いる十二機と「千代田」の二式水戦は、B17を後続に任せ、一目散にドントレス編隊に向かった。

護衛戦闘機のいない爆撃機ほどもろい物はない。

我が戦闘機は二線級の旧型戦闘機と言えど、やはりドントレス爆撃機の敵では無かった。

我が方二十二機に対し二十機のドントレスは密集隊形を取り、必死に抵抗するが、我が戦闘機の突入一斉射で五機が墜落。

敵の密集隊形が散開すると、間髪入れず巴戦に持ち込み、逃げ回るドントレスを次々と撃ち墜として行った。

一方、B17部隊にも他の戦闘機部隊が続々と到着し、「山汐丸」「千種丸」の零式戦闘機二四機、「あきつ丸」「にぎつ丸」「ときつ丸」の一式複座戦闘機三十二機、「千歳」「日進」「神川丸」の二式水上戦闘機十八機の計七十四機が交互に攻撃をしかけていた。

さすがのB17も、我々の執拗な攻撃により次第に落伍する機が出はじめ、我々の高角砲の射程内に至った時点においては半分の六機に減っていた。

しかし我々帝国陸軍はこれで手加減をするさほど野暮ではない。

B17が射程圏内に侵入すると同時に、海軍の護衛艦や我が船舶砲兵部隊は「待ってました」とばかりにあらゆる高射砲と高角砲を打ち上げたのだ。

従来、高空で侵入する爆撃機に高角砲弾が命中することは稀であったが、今時の帝国陸海軍は違う。

各艦の電探と射撃管制盤に導かれた砲弾は、次々とB17に命中、六機の大空の要塞は次々と火を噴き、次第に高度を下げ、そして墜落。

その全てが紺碧の海中へと消えた。

B17が全て墜落した時、熊野丸戦闘機隊が攻撃していたドントレスの最後の機も、断末魔の叫びを上げていた。

機体中が穴だらけとなったドントレスは、ガクリと機首を下げると大爆発を起こし、その全てが大空へと散ったのであった。

彼らドントレス隊としては、我々がB17迎撃に躍起になっていた間に船団上空に侵入し、高空からの急降下爆撃を行う魂胆だったのだろう。



もし我々が他の船の戦闘機と同様B17のみに気を取られたまま、ドントレス隊の急降下爆撃を許していたら………

そう考えた時、私は恐怖に鳥肌が立つと同時に、誰よりも早く敵機来襲を考えた私の判断は間違っていないのだと、改めて思い直したのであった。

六月十六日 現地時間 午前五時

故郷日本は未だ闇の中であろう十六日の朝、船団の前方にうつつと小さな島が見えてきた。

ミッドウェイ諸島 太平洋の真ん中に浮かぶ日米決戦の最も重要とも言える郡島である。

ここを占領し、航空隊を配備することにより、帝国は太平洋に置ける勢力圏を大幅に拡大し、ハワイは真珠湾を目と鼻の先に据えることができるのである。

ミッドウェイ諸島へ近づくとつれ、その様相が尋常では無いことがわかってきた。

いくつかの小さな島のあちらこちらから黒煙が上がり、見える範囲の木という木はもうもうと燃え上っていた。

前日から今朝未明にかけて、海軍の戦艦部隊が島に向けて猛射を加えた結果ということはずぐに理解できたが

(ここまでせずとも……)  
と、いささか悲哀の情を持ったものであった。

「旗信、『船団は予定した地点に停泊し、上陸戦の準備をせよ。』」

船団は二列縦隊から散開し、それぞれ作戦にて決められた海域に停泊した。

イースタン島を攻略する第四部隊の「日向丸」「撰津丸」を除いた司令船「神州丸」、第一・第二・第三・第五部隊の十一隻は、サンド島の北と西に分かれ、珊瑚礁を避け海岸から千米の地点に錨泊した。

上空には船団上空の警戒として「山汐丸」「千種丸」や各特殊船そして海軍空母の戦闘機が飛び交い、敵の空襲に備えていた。

>>ヒコヒコ、チンチン<<

(我、敵飛行機ノ攻撃ヲ受ク)

ふと私は開戦初頭のコタバル上陸戦を思い出していた。

昭和十六年 十二月八日 早朝

作戦通りコタバル湾に進入錨泊した三隻の輸送船は、それぞれ上陸に向けて準備を開始した。

あくまでマレー上陸戦の一作戦に過ぎないこの作戦も、シンゴラやパタニーと同様に成功裏に終わるものと誰もが考えていた。

その時、数機のイギリス空軍機が三隻に襲いかかったのである。

投下された爆弾は、「淡路山丸」に三発、「綾戸山丸」に三発、

「佐倉丸」に二発が命中、大爆発を起こした。

「綾戸山丸」「佐倉丸」の二隻は懸命な消火活動により鎮火、湾外への退避に成功したが、「淡路山丸」は各所で誘爆、大火災となり一日中炎上し続け、夜間にオランダ海軍潜水艦の雷撃により沈没した。

一方、上陸部隊も予想外の苦戦を強いられ、戦闘は難航を極めた。

敵の猛反撃の結果、上陸部隊・揚陸隊述べ八百名以上の死傷者を出し、上陸用舟艇も十五隻が沈没・大破した。

我が陸軍は、本来ならばこの被害を教訓にするべきところを見事に等閑にし、せいぜい対空機銃を増やす程度の補強で満足してしまつたのである。

しかし、陸海軍が再編されてから、この体質は目に見えて変わつて行つた。

補給や輸送というものが重要視され、新造の戦時高速型輸送船をはじめ、陸軍や軍属の船舶には、大量の対空兵器や高性能の電波警戒機が搭載された。

その変わりぶりはまるで、かの弾井海軍少佐の思惑によって陸海軍が動いているのではないかと思つてしまつくらい、彼の主義主張そのものの姿なのであつた。

そして今、生まれ変わった陸軍揚陸部隊は、上空を飛び交う護衛機と、周囲を固める護衛艦と共に、大上陸戦を決行しようとしていたのであつた。

「上陸部隊、発動艇に移乗せよ。」

兵員室に乗っていた海軍連合陸戦隊が、船倉格納庫の発動艇に移乗を開始した。

既に「神州丸」の後部格納庫からは数艇の駆逐艇が発進し、海軍の駆逐艦と共に周囲の対潜哨戒を行っていた。

「神州丸」所属の高速艇は連絡のために船と船の間を忙しく動き回り、特殊発動艇や装甲艇も泛水を終えて上陸に備えている。

「後部扉開け」

轟音を立てて船尾の扉が観音開きを開き、各船とも発進準備は整った。

「各発動艇、発進せよ。」

小型の特殊発動艇を先頭に、次々と大発動艇が滑り台を降りてゆく。

第一段階上陸部隊の百五十人の陸戦隊が分乗した三隻の大発と、戦車や加農砲など重砲を搭載した八隻の超大発が発進、最後に海軍の特二式内火艇二隻が船尾を離れると、舟艇格納庫には第二段階上陸部隊の物資弾薬を満載した超大発二隻が残るだけとなった。

この上陸戦は二段階作戦となっており、まず特殊船から発進した大発六十四隻、千百人が三手に分かれて海岸に突撃、敵の掃討と海岸線の確保を目指す。

そして海岸線の確保とともに、第五部隊の戦時高速型輸送船搭載三十隻は千四百人と、各特殊船に待機している発動艇に満載された物資弾薬が上陸するのである。

一方、「熊野丸」の飛行甲板も上陸部隊援護のため、一式複座戦闘機と二式特殊偵察機の発進準備に追われていた。

翼下に小型爆弾を取り付け、襲撃機へと様変わりした一式戦闘機と二式偵察機は、上陸開始とともに各船から飛び立ち、上陸部隊の爆撃要請に合わせて銃爆撃し敵の部隊を撃破するのである。

陸軍船舶部隊創設以来、初めて太平洋の大海原で行う島峡への上陸作戦の開始は、今まさに目前に迫っていた。

「上陸部隊は司令船指揮艇（特殊発動艇）に集合、所定の位置で待機せよ。」

作戦時には指揮艇と呼ばれ、距離を置いて待機する「神州丸」の特殊発動艇に続くように、これまた各部隊の特殊発動艇に先導された発動艇が集合してゆく。

三群に分かれた六十四隻の発動艇のそれぞれを囲むように八隻の装甲艇と四隻の特二式内火艇は、縦横に一系の乱れもなく整列した。

遂に司令船「神州丸」から上陸作戦の開始が下令された。

「神州丸」の楼牆に信号旗がスルスルと登った。

「熊野丸」の船橋はいつになく張りつめた空気で、そこいる全員

が神州丸のマストを見つめ、息を飲んだ。

「上陸を開始せよ。」

昭和十七年六月十五日 現地時間午前六時

ミッドウェイ群島サンド島及びイースタン島における陸海軍共同の上陸作戦が同時に開始された。

大発の発動機とスパイラルプロペラが唸りを上げ、上陸部隊が一斉に進撃を開始、海岸に向かって突撃した。

(静かだ……)

陸上からの反撃が一切無く、気味の悪い空気が漂う中、第三部隊「摩耶山丸」の大発が真っ先に着岸、歩板を下げると中にいた陸戦隊が一斉に飛び出した。

ほとんど時を違わずに他の発動艇も着岸し次々と陸戦隊が上陸、ゆっくりと前進を開始した。

先頭の部隊が海岸線から五十メートルほどの地点に近づいたとき

ドン、ドン……

パンパン、パンパン……

今まで一発も撃たず静まり返っていた擬装された沿岸砲や、森の

中の退避壕で帝国海軍の攻撃に耐え続けていた守備隊の銃砲が一斉に火を吹いた。

「全員伏せろー！」

「衛生隊！衛生隊はどこだ！」

一 式機関短銃や二式突撃銃を持った兵隊がバタリバタリと倒れてゆく。

アメリカ軍の一斉攻撃に、上陸部隊は釘付けとなった。

しかしミッドウェイ守備隊の敢闘もここまでであった。

タタタタタタ……

ドーン……

陸戦隊が支援要請をする間も無く、海上の陸軍装甲艇が自慢の舟艇砲で攻撃を開始、上空からは陸軍空母と特殊船の一式複座戦闘機と二式特殊偵察機が銃爆撃を開始した。

一方陸上でも、上陸した特二式内火艇が敵中に突入し攪乱させた。

そして超大発が二十六台の二式中戦車を揚陸した時、海岸での戦闘の勝敗は決した。

アメリカ軍は一応の対戦車砲を装備してはいたが、二式戦車はそ

の全てを弾き返し、頼みの重砲や沿岸砲も海空からの援護により破壊し尽くされていた。

午前六時四十分

アメリカ軍ミッドウェイ守備隊は海岸線を放棄、約二千人が熱帯雨林の奥に逃げ込んだ。

米守備隊の撤退と共に海軍工作隊は防御陣地の、陸軍船舶工兵隊は海岸堡の構築を開始した。

海上でも、第五部隊の高速輸送船がデリックによって大発を泛水させていく。

我々も、格納庫内の超大発を発進させた。

我が優秀な船舶工兵がおよそ一時間で海岸堡を完成させると、陸戦隊野戦病院では手のほどこし様のない重傷者が陸軍病院船「ぶゑのすあいれす丸」に搬送されてゆく。

第四部隊の担当しているサンド島上陸部隊からも逐次連絡が入って来ていた。

サンド島とほぼ同時にイースタン島攻略の海軍陸戦隊は、ほとんど敵の反撃を受けずに上陸、進撃し小型機飛行場を包囲、米守備隊に投降を呼びかけているところであった。

イースタン島の守備隊はすぐに投降した。



(戦わずして降伏するとは、やはりアメリカ人だな。)

私はそう思ったが、海と空から猛爆が加えられ、二倍以上の帝国軍に上陸された二百人程度の守備隊のことを考えると、投降も止む無きものであるとも考えるものであった。

我が軍の圧倒的な攻撃によりイースタン島は陥落した。

しかし、サンド島はそうは問屋が卸してくれなかった。

日没までには飛行場を包囲するという作戦計画に合わせて現地時間午後一時には熱帯雨林への突撃が開始された。

しかし、海岸線より後退し熱帯雨林の中でひっそりと隠れて我が上陸部隊の攻撃を待ち構えていたアメリカ軍守備隊の反撃によって前線は停滞した。

熱帯雨林での戦闘には強いと考えられていた帝国軍であったが、それは帝国陸軍のことであり、海軍陸戦隊は島嶼作戦に慣れてはいたものの、熱帯雨林での戦闘にはまだ経験不足であったのだ。

一方、サンド島の地形や環境を熟知した守備隊は劣勢を物ともせず、ある者は隠れて、ある者は後退しつつ、攻めいる陸戦隊を果敢に防ぎ続けていた。

やはり上陸作戦は我々帝国陸軍に任せてもらえれば良かったのだ。

『占領は自分らで行うから陸軍は運んでくれるだけで良い。』

（陸軍船舶隊は運送屋だとも言うのか。）

（海軍は我々陸軍を小馬鹿にしているのか。）

（弾井少佐、君もそうなのか。我々を運送屋程度の存在にしか考えていないのか。）

生粋の陸軍軍人である私にとって、海軍陸戦隊の苦戦と海軍の陸軍船舶に対する見下した態度は、私の気持ちを苛立たせていくだけであつた。

しかし、この「怒り」と「葛藤」は「陸軍内海軍部隊」という半端な存在である「陸軍船舶」に乗るものが、いずれ必ず突き当たるものなのであつた。

私が憤然としていても、問題を解決に導くことはない。

陸戦隊は我々の支援を必要としているのだ。

私は船長に、飛行師団の総力を上げた空撃と、海上に待機している海軍戦艦部隊に再度の艦砲射撃を要請するよう進言した。

船長も司令部も、私と同じ考えであつたらしく、支援はすぐに発動され、上陸部隊の一時後退に合わせ海空からの支援攻撃が決行された。

「あきつ丸」など特殊船や「山汐丸」「千種丸」ら護衛空母から飛び立った飛行機は海軍陸戦隊と連絡を取りつつ熱帯雨林の守備隊を掃射し、帝国海軍第一艦隊の戦艦部隊は、木々を焼き払い、逃げ

惑う米兵を吹き飛ばした。

工作隊は戦車の進路を開き、海岸堡陣地に設置された九二式十糎加農砲や九六式十五糎榴弾砲が戦艦部隊に負けじと全てを風呂払った。

前線は次第に押し進められ、午後五時には敵飛行場を包囲した。

とは言っても、サンド島飛行場は既に飛行場機能を失っていたのみならず、度重なる砲爆撃により、基地の原型を留めてはいなかった。

遂にサンド島守備隊に白旗が揚げられた。

時を置かず、米守備隊司令官のシマード海軍大佐と陸戦隊司令官の太田実海軍大佐の間で降伏調印式が行われアメリカ軍ミッドウェイ守備隊は全軍が正式に降伏した。

米兵の中にはハワイからの増援を信じ徹底した籠城戦を主張した者がいたそうだが、陸戦隊が基地に着いた時、塹壕・避難壕は死者と重傷者で溢れかえり、戦闘を継続できる様な状況では無かったと言っ。

飛行場の復旧と海軍航空隊のミッドウェイ上陸を残すのみとしたMI作戦は、日米双方に大きな被害を出して終了した。

帝国軍の損害は上陸部隊三千名中、戦死八十二名、戦傷千二百名。アメリカ軍の損害は守備隊二千五百名中、戦死三百名、戦傷千六百名であった。

我々の予想に反しアメリカ兵は勇敢であつた。

特にシャノン大佐率いる海兵大隊は勇猛果敢であり、戦術も素晴らしいものであつた。

我々がこの戦争を勝ち進んで行く中で、アメリカ兵は愛国心に満ちており、その突撃精神は帝国陸軍に匹敵し、戦法は巧妙であるといふことを忘れてはならないのである。

一仕事終えた私は一眠りするため、副官私室へと歩を進めた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6551e/>

---

激闘 陸軍船舶戦記【暁の新生帝国外伝第四弾】

2010年10月28日03時46分発行